ISSN 2432-437X

人間文化研究機構　ネットワーク型基幹研究プロジェクト
地域研究推進事業　南アジア地域研究

FINDAS
The Center for South Asian Studies,
Tokyo University of Foreign Studies
東京外国語大学　南アジア研究センター

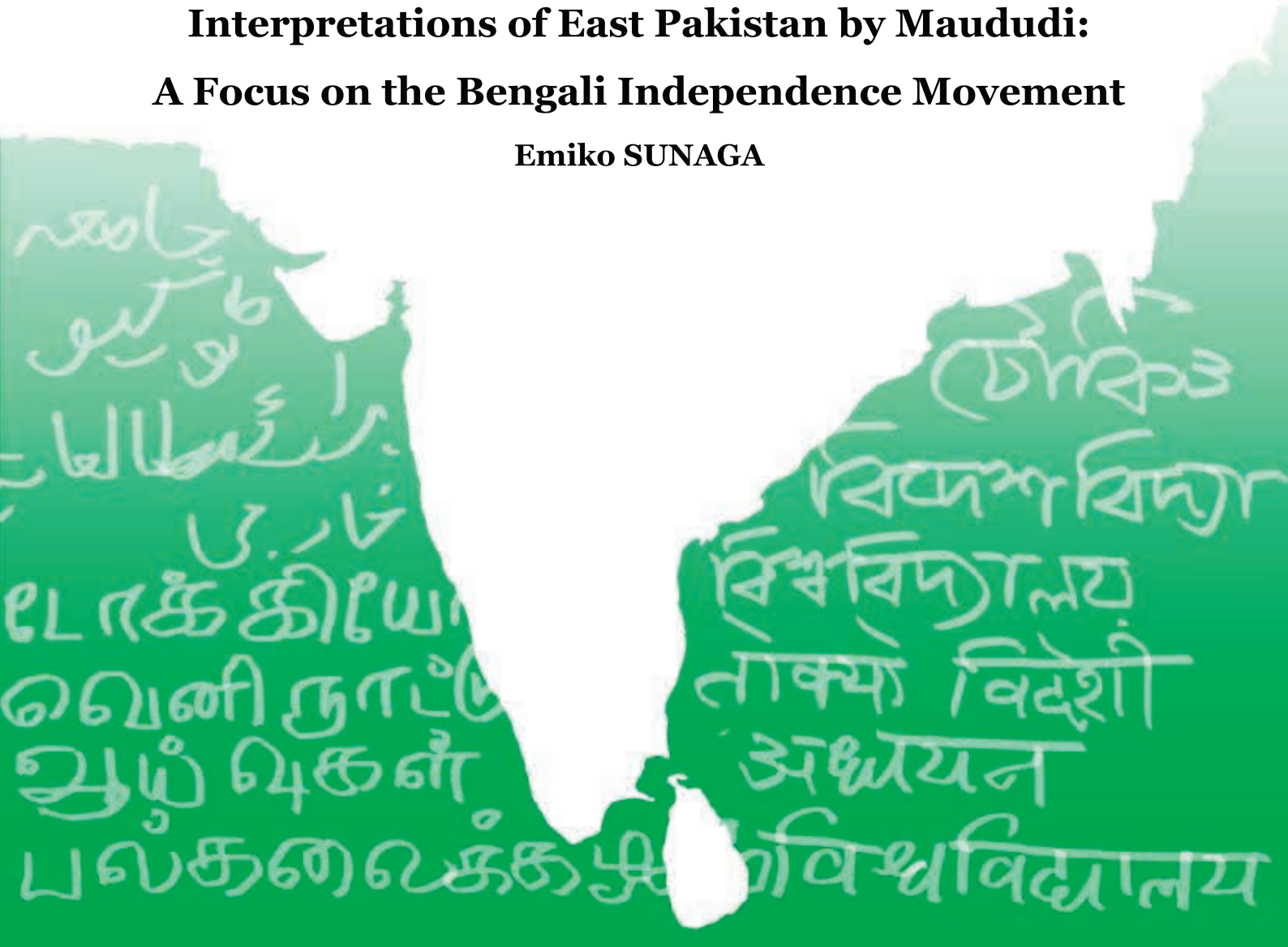
東京外国語大学南アジア研究リサーチペーパー　2

マウラーナー・マウドゥーディーの東パキスタン／バングラデシュ史観

須永恵美子

Interpretations of East Pakistan by Maududi: A Focus on the Bengali Independence Movement

Emiko SUNAGA



東京外国語大学拠点　南アジア研究センター
Center for South Asian Studies, Tokyo University of Foreign Studies (FINDAS)

研究テーマ「南アジアにおける文学・社会運動・ジェンダー」
Literature, Social Movements, and Gender Issues in South Asia

本拠点は、現代南アジアの構造変動に関する理解を、重層化・多元化・輻輳化する社会運動の歴史・政治・社会学的分析と文学分析、およびジェンダー視角を軸として深めることを目的とする。さらに、対象研究領域に関して、すでに東京外国語大学が所蔵する文献・史資料群を充実させることを系統的、意識的に追及し、国内における文献拠点となることをめざす。

本拠点の第 1 期（2010～2014 年度）の研究活動を通じて、経済自由化・グローバル化にともなう現代インドにおける構造変動が、個人、家族、コミュニティ・レベルの人々の意識、ジェンダー関係に劇的な変容をもたらしたこと、アイデンティティの複合性と可変性がさらに加速化していること、ならびに、インドを特徴づけている活性化された民主政治が、それまで社会的周縁に位置づけられてきた諸集団の積極的な異議申し立てなしには理解できないという事実が明らかになった。第 2 期（2015～2019 年度）では、社会運動の諸相をとくに、人的紐帯の変化、および、それらを支える情動や感性の側面に焦点をあてること、対象地域をさらに、南アジア地域に拡大するとともに、中国・東南アジア・イスラーム地域などの他地域との比較研究を意識的に組織化し、理論化を主導することに重点的に取り組む。

東京外国語大学は、ウルドゥー語・ヒンディー語・ベンガル語を中心に南アジアの諸言語の教育、および南アジア地域研究に関して明治期以来の長い歴史を有し、世界的に活躍する高度職業人ならびに日本における南アジア研究の中核を担う研究者を輩出してきた実績がある。また、国内有数の南アジア諸語文献・南アジア関連の文献・史料の所蔵を誇る。さらには、海外の南アジア研究者との学術交流にも長い伝統がある。こうした特長を最大限に生かしつつ、本拠点はさらに国内外の南アジア研究者のネットワークのハブとして共同研究を組織するとともに、若手研究者の育成を重点的に行い、南アジア地域研究のレベルを明示的に高めることをめざす。

研究ユニット 1「輻輳する社会運動における実践と理論」
研究ユニット 2「社会変動と文学」

FINDAS リサーチペーパーシリーズ 2

マウラーナー・マウドゥーディーの東パキスタン／バングラデシュ史観

須　永　恵　美　子

マウラーナー・マウドゥーディーの東パキスタン／バングラデシュ史観*

須永恵美子**

Interpretations of East Pakistan by Maududi:

A Focus on the Bengali Independence Movement*

SUNAGA Emiko**

Abstract

This paper aims to examine the views of Maulana Maududi on the East Pakistan issue as can be understood from his speeches and articles. Saiyid Abū al-A'lā Maudūdī (1903-1979) was a famous Islamic thinker and political leader of Pakistan who had a major role in the Islamic revivalism of the 1970s in Pakistan and in other countries. He established the religious party Jamaat-e Islami (Islamic party) in 1941. More than 150 books and over a 100 edited books of Maududi were published. For this paper, I surveyed the books on East Pakistan published from the 1940s to 1979. From them, I gathered records of his speeches and articles of the period from 1956 to 1975. Bangladesh was known as the East Bengal province, a part of Pakistan from 1947 to 1955, and as the late East Pakistan province from 1955 to 1971. Maududi visited East Pakistan ten times, mostly for political campaigning as the head of Jamaat-e Islami. His books reveal his views and opinions on East Pakistan formed during these sojourns into this area. The first point we notice from his speeches and articles is his views on Bengali literature and language. Maududi supported the movement to make Bengali as the national language. The second theme I extracted from his articles and speeches is the independence movement, focusing mainly on the election system and the six-point autonomy plan proposed by Sheikh Mujibur Rahman. The third topic I surveyed is the recognition of Bangladesh as a distinct country with a separate identity after 1971. From his writings, speeches, and articles, it is evident that he had a clear perspective of the issues faced by East Pakistan. This paper is limited by research on Maududi's

* 本稿は、2015 年 5 月 24 日に開催された 2015 年度第一回 FINDAS 若手研究者セミナー（於東京外国語大学本郷サテライト 3F セミナールーム）における発表をもとに、大幅に史料を追加し、加筆したものである。研究会においてご意見・ご批判をくださった、諸先生方に謝意を示したい。

** 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任助教、大東文化大学国際関係学部非常勤講師。Research Associate of Kyoto University, Graduate School of Asian and African Area Studies. Visiting Lecture of Daito Bunka University, Faculty of International Relations.

perspectives and his messages based on the speeches he made or the articles he wrote; it does not include the reactions to them from East and West Pakistan. This limitation can be overcome in future research on the independence movement in Bangladesh and the impact of his speeches on it.

1. はじめに—マウドゥーディーと東パキスタン独立に関する概略

20 世紀のパキスタンを代表する思想家マウラーナー・サイイド・アブルアアラー・マウドゥーディー（Saiyid Abū al-A‘lā Maudūdī, 1903 年～1979 年）は、『イスラームにおけるジハード』（1930）や 6 巻本のクルアーン解釈書『クルアーンの理解』（1972）といった著作を通して、世界各地のイスラーム復興に影響を及ぼしてきた。

マウドゥーディーは、英領インドのアウランガーバードに生まれ、ウルドゥー語を母語として育った。幼くして父を亡くし、10 代から兄とともにジャーナリストとして文筆業に従事した。1933 年にはウルドゥー語の月刊誌『クルアーンの解釈者 *Tarjumānulqurʾān*』（1933～現在）を創刊し、ムスリム知識層にイスラーム国家の樹立を呼びかけた。さらに、38 歳で政治団体ジャマーアテ・イスラーミー（イスラーム党、Jamā‘at-i Islāmī: 以下 JI）を設立し、自ら初代党首として 1972 年まで同党を率いた [山根 2001]。マウドゥーディーは同党の政治家として、ウラマーとして、憲法制定やカーディヤーニー問題に取り組んできた。JI は分離独立時に組織を分割したものの、現在までパキスタン国内最大規模のイスラーム主義政党として活動している。国際的にも、イスラーム世界連盟の創設委員としてその設立に携わった経歴や [Saulat 1979: 187]、ハーキミーヤ、ジャーヒリーヤなどの現代的概念を提唱したことが評価されている [小杉 2006: 293-294]。

マウドゥーディーの思想に関しては、主権論やイスラーム立憲制、女性の権利といった様々な分野から研究が進められている [Adams 1966; Ahmad 1976; Riaz 1976; Gilani 1984; Jackson 2011; Hartung 2014]。彼の経済論に関しては、現代のイスラーム経済の理念的源泉とも指摘され、英語に訳された著作を通じて各地で読まれている [Caldwell 1982; Khān 1983; Chapra 2004; Khurshid 2011; Zaman 2011]。一方で、東パキスタンについては関連する著作自体も少なく、これまでのマウドゥーディー研究の主題としては扱われてこなかった。本稿では、1971 年の東パキスタン独立に際し、マウドゥーディーがどのような発言をし、いかなる見解を有していたのか、明らかにする。

本稿ではまず、マウドゥーディーが当時どのように自らの思想を発信していたのか、発言を残してきたのかを整理する。2 章では、マウドゥーディーの東ベンガル州／東パキスタン州への渡航歴をまとめる。3 章では、自治権拡大運動の素地となった、ベンガル語をはじめとするベンガル文化に着目する。4 章では、東パキスタンの自治権拡大運動についての発言をまとめる。特に、6 項目要求を発表したアワミ連盟のムジブル・ラフマンを名指ししての批判や、彼への書簡を検証する。5 章では、バングラデシュ独立後の記録を扱う。

なお、本稿では東ベンガル州（1947 年～1955 年）と東パキスタン州（1955 年～1971 年）の地域社会を総称して東パキスタンと呼ぶ。

1-1. 東パキスタンに関する著作

マウドゥーディーは、ウルドゥー語で多くの著作を残している。著者とされる書籍は 177 冊あり、その他にも編著として自身の論稿をまとめたものが 111 冊ある [篠置 2013]。自らの雑誌『クルアーンの解釈者』にはほぼ毎号寄稿しており、その他の雑誌や新聞でも記事を書き、さらに単行本出版の編集作業などにもあたっていた。これらには、『イスラームにおけるジハード』や『パルダ』をはじめとし、政治関係や経済、宗教など幅広いテーマの書籍が含まれている。なかでも『イスラームと産児制限』(1943) や『クルアーンの経済に関する教え』(1969) などイスラームの普遍的なテーマを扱ったものが多く、特定の地域を扱った作品は限られている[1]。東パキスタンに関する著作は 3 冊であった。

1)『東パキスタンの状況と問題の分析及び改革の方策』(1956) [2]
2)『ダッカでの演説』(1963)
3)『東パキスタン陥落の理由』(1972)

例えば他の分野では、自著の 177 冊中、宗教学関係は約 45 冊、政治関係は 25 冊、JI は 7 冊、経済関係の著作は 14 冊であった。一つの著作の中で複数のテーマを扱うなど、必ずしも分類は明確ではないが、著作の傾向からは、東パキスタンへの関心はそれほど高く無かったと見られる。

他に、東パキスタンが争点の一つとなった 1954 年州議会選挙、1970 年国民議会・州議会選挙を扱った著作として、以下があげられる。

4)『合同選挙』(1956)
5)『来たるべき選挙と国民の責任』(1968)
6)『我々はどのようなパキスタンを望むのか？』(1970)
7)『パキスタンの選挙結果とそこにおける JI のポジション』(1971)

これらを含め、288 冊の書籍のなかで、初版が東パキスタンで出版されたものや、原典がベンガル語で出版された作品は確認できなかった。

一方で翻訳は多く、クルアーンの解釈書『クルアーンの理解』などは、ウルドゥー語からベンガル語に訳され、現在まで再版が繰り返されている [Maudūdī 2004]。

---

[1] 特定の地域を扱う著作としては『アラーハーバードのパンディット・マダン・モーハン・マーラヴィーヤ』(1919)、『スミルナにおけるギリシャ人の暴虐』(1921)、『スミルナの事件に関する連合国委員会の報告』(1921)、『トルコにおけるキリスト教徒の状況』(1922)、『ハイダラーバード藩王国と英国政府』(1928)、『デカンの政治史』(1944)、『カアバのキスワの歴史』(1963)、『カシュミール問題』(1965)、『パキスタンの将来と学生』(1966)、『中東の警告的な悲劇』(1967)、『アル＝アクサー・モスク事件』(1976) があげられる。

[2] 1956 年 3 月 2 日のダッカでの講演の記録。[Aḥsan 1971] に収録 [篠置 2013: 70]。

上記の著書以外にも、JI の冊子やパンフレット、その他の雑誌 *Nigār*、*Zamīndār*、*Zindagī* や JI の党紙 *Jasārat* などにも頻繁に寄稿・執筆していた。他に残されている資料としては、金曜礼拝の説教 [Maudūdī 2011]やラジオ・パキスタンでの放送を含めた講演録 [Ḥijāzī 2008]、インタビュー録 [Abū Ṭāriq 1976]、書簡 [Jān 2011]などがある。

2. 東ベンガル州／東パキスタン州への渡航歴

まず、マウドゥーディーと東パキスタンの直接的な関わりについて、彼の渡航歴から見ていきたい。

先述の通り、マウドゥーディーは現インドのアウランガーバードの生まれであり、1947 年の分離独立後にはパキスタンのラーホールへ移住した。その間にデリー、ボーパール、ハイダラーバード（インド）、パターンコートなどを転居したが、現バングラデシュ領には居住したことがない。

国外との交流では、マウドゥーディーはイスラーム世界との連携や知的交流にも精力的であり、幾度となく海外に足を運んでいる。1956 年には、シリアのダマスカスで開かれた第一回国際イスラーム会議で、パレスチナ問題に関しての発言を行った[3] [Badri 2003: 490]。1960 年 12 月には、サウディアラビア国王の招待で、マディーナ大学のシラバスを準備するためにサウディアラビアに渡航している [Saulat 1979: 187]。

その他にも、1962 年 5 月には、マッカで創設されたイスラーム世界連盟の初代委員に選任されている。この会議では、マウドゥーディーの講演をうけて、カシュミールの解放が可決された [Saulat 1979: 187]。さらに、1969 年 9 月には、モロッコ政府の招待により、フェズで開かれた国際教育会議に参加した [Abd 1978: 66; Saulat 1979: 188]。

このように、海外への渡航歴も多いマウドゥーディーが、初めて東パキスタンの地を踏んだのは、1956 年、53 歳の時のことであった。これは、JI の党首として 1 ヶ月以上にわたる遊説の旅であった。

2-1. 一度目の東パキスタン訪問：1956 年 1 月 26 日～3 月 4 日

マウドゥーディーは 1 月 26 日にラーホールからダッカへ向かった。1 月 27 日には、早速最初の演説をダッカで行っている [Hasan 1984: 492]。この旅の行程は、以下のとおりである。

1956 年 1 月 26 日　ラーホールからダッカへ
1 月 27 日　ダッカにて講演。内容はイスラームの歴史、パキスタンとイスラーム的価値観、人々の義務について [Hasan 1984: 492-493]
1 月 30 日　シレットにて講演。内容は JI の活動、ベンガル語、東ベンガル州のザミーンダーリー制批判 [Hasan 1984: 493]

[3] 当時 53 歳だったマウドゥーディーは、長い拘留生活のため足を悪くしており、ダマスカスのウマイヤ・モスクでは椅子を使って礼拝をしていた [Badri 2003: 490]。

1 月 31 日　シレットにて知識人層向けに講演。ベンガル語とイスラーム書籍について [Hasan 1984: 493]

2 月 1 日　コミラにて 2 時間の講演。内容は憲法草案、戒厳令、国語、東ベンガル州のザミーンダーリー制批判 [Hasan 1984: 494-495]

2 月 2 日　チッタゴン[4]にて 2 時間の講演。内容はイスラーム文化、パキスタンとイスラーム、世俗主義について [Hasan 1984: 495-496]

2 月 6 日　チッタゴンにて講演。内容は JI の活動、国家とイスラームについて [Hasan 1984: 496]

2 月 7 日　ナラヤンゴンジにて講演。内容は共産主義、東ベンガル州の貧困について [Hasan 1984: 496]

2 月某日　ダッカのウラマーの会議にて発言。内容は憲法のイスラーム性、東ベンガル州の改名、東ベンガル州のウラマーらの西パキスタン訪問の推奨について [Hasan 1984: 497]

2 月 10 日　ボリシャルにて講演。内容は東ベンガル州の改名、選挙について [Hasan 1984: 497]

2 月 10 日　ボリシャルのカレッジにて講演。内容は教育制度におけるイスラーム指向、国語としてのベンガル語の必要性、ベンガル文学について [Hasan 1984: 497]

2 月 10 日　ボリシャルにて講演。内容は東ベンガル州のイスラームへの傾倒の評価、憲法におけるイスラーム的人生について [Hasan 1984: 497-498]

2 月 11 日　クルナにて講演。内容は東ベンガル州への敬意、イスラーム、JI、憲法、東ベンガル州の改名について [Hasan 1984: 498]

2 月 13 日　ジェソールにて講演。内容はアワミ連盟批判、東ベンガル州の改名について [Hasan 1984: 498-499]

2 月 15 日　フォリドプルにて講演。内容はパキスタン運動、スフラワルディ批判、憲法について [Hasan 1984: 499]

2 月某日　クシュティアにて講演。内容はパキスタン独立、東ベンガル州の合同選挙要求批判、世俗憲法批判、東ベンガル州のヒンドゥー教徒への敬意とマイノリティの権利について [Hasan 1984: 500]

2 月某日　ラジシャヒにて講演。10 万人以上の聴衆が集結。内容はベンガル民族主義を掲げる東ベンガル州の指導者批判、スフラワルディ批判 [Hasan 1984: 500-501]

2 月某日　ラジシャヒの弁護士向けに講演。内容は憲法草案におけるイスラーム性と民主制について [Hasan 1984: 501]

2 月 22 日　ボグラにて講演。内容は国内の難民、憲法、アワミ連盟批判 [Hasan 1984: 501]

2 月 23 日　ガイバンダにて 3 時間の講演。聴衆は 6～7 万人。内容は分離選挙の必要性 [Hasan 1984: 502]

---

[4] コミラからチッタゴンに到着するまで、マウドゥーディーは主要駅で人々と面会し、スピーチを行った。終着地であるチッタゴン駅では、数千人が「生きる殉教者」であるマウドゥーディーをひと目見ようと待ち構えていた [Hasan 1984: 495]。その後の訪問先である東パキスタン各地でも同様の光景が見られた [Hasan 1984: 497 , 498, 499, 500, 501]。

3 月 2 日　ダッカにて講演。内容は印パ独立時の東パキスタンの状況、東パキスタンにくすぶる不満、言語問題、公職の問題、西パキスタンとの経済格差、共産主義、ヒンドゥー教徒、JI、選挙、憲法、東ベンガル州の改名について [Aḥsan 1971: 18-45]

2-2. 二度目の東パキスタン訪問：1958 年 1 月 30 日～3 月 16 日

二度目の東パキスタン滞在は、選挙を控えた 2 年後の 1958 年のことである。この 45 日間の滞在で、マウドゥーディー一行は 24 市町村を周り、遊説を行った。1 月 30 日にダッカに到着したマウドゥーディーは、空港にてインタビューに答え、国民の意に反して導入された合同選挙と、ベンガル自治権拡大運動の助長を牽制することが今回の渡航の目的であると述べた [Hasan 1986: 36]。

1958 年 1 月 30 日　ダッカに到着
1 月 31 日　ダッカにてマウドゥーディーを歓迎するレセプション。パキスタンの建国意義について講演 [Hasan 1986: 36]
2 月某日　チッタゴンにて講演。パキスタンのイスラーム性について [Hasan 1986: 37]
2 月某日　コミラにて講演。内容は合同選挙におけるヒンドゥー教徒の優位性について [Hasan 1986: 37]
2 月 8 日　シレットにて講演。内容は先の選挙の批判 [Hasan 1986: 37]
2 月 11 日　ラジシャヒにて講演。内容は郷土や祖国、イスラームへの愛について [Hasan 1986: 37-38]
2 月 15 日　マイメンシンにて講演。内容はイスラームと政治、19 世紀の国家について [Ḥijāzī 2008: 211-215]
2 月 23 日　サイドプルにて講演。内容はアワミ連盟政権の人権剥奪への批判 [Hasan 1986: 39]
2 月 27 日　ディナジプルにて 3 時間の講演。内容は国政問題について [Hasan 1986: 39]
2 月 28 日　タクルガウンにて講演。内容は合同選挙の批判 [Hasan 1986: 39]
3 月 15 日　ダッカにて記者会見。内容は東ベンガル州の 8～9 割のムスリムが分離選挙を望んでいるが、一部の上層部によって阻まれていることについて [Hasan 1986: 40]

2-3. 三度目～六度目の渡航（1962 年 11 月～1967 年 11 月）

マウドゥーディーは、1962 年 11 月第 3 週より、18 日間にわたる三度目の東パキスタン渡航を果たした。各地で講演を行い、1）ベンガル語のイスラーム文学の脆弱性、及び JI がベンガル語のイスラーム文学を出版したにも関わらず、戒厳令の影響で警察署に押収されたこと、2）東パキスタンの人々はイスラームを愛しており、独立は考えていない。しかしヒンドゥー教徒の影響下にある一部のグループが、ベンガル民族主義に基づく独立国家を求めていること、3）東パキスタンが抱える中央政府への不満、4）パキスタン国内の経済格差、5）1962 年憲法の批判と民主的憲法の制定、6）東パキスタンの防衛などを主張した [Hasan 1986: 134]。

翌 1963 年 11 月の第 4 週には、四度目の訪問をし、ダッカの JI 州支部集会にて講演を行った。聴衆は 10 万人を超え、JI の使命、憲法について語った [Hasan 1986: 164-165]。帰国後の

1964 年 1 月には、アイユーブ政権によって JI が政党活動を禁止され、マウドゥーディーは逮捕された [山中 1992: 74]。

1966 年 1 月、アワミ連盟委員長のムジブル・ラフマンが 6 項目要求を提出した。これは、東パキスタンの知識人が作成した 4 項目の憲政改革プランを修正したものである[5]。この綱領は国防や経済の側面から東パキスタンの独立を促すものであり、西パキスタンにとって脅威であった。6 項目要求に反論するため、マウドゥーディーは 1966 年 2 月の第 3 週に、ダッカ、チッタゴン、ディナジプル、クルナを訪問した。五回目となったこの外遊では、JI の集会[6]で JI の使命、シャリーア、タシュケント合意批判、東パキスタンの防衛について講演をおこなった [Hasan 1986: 211-212]。また、ダッカ、チッタゴンで記者会見を開き、政党間の相違やタシュケント合意と 6 項目要求を批判した [Hasan 1986: 212]。

1967 年 11 月 24 日からの 1 週間、六度目の渡航を行った。ベンガルにおける独立の士気は高まっており、また 64 歳になったマウドゥーディーの体調は徐々に悪化していたため、以前のように精力的な訪問は叶わなくなっていた。11 月 24 日にダッカ空港に到着すると会見を行い、民主制の必要について説いた [Hasan 1986: 263]。11 月 25 日には、パキスタン民主運動の会合に参加し、翌 26 日の講演では、中東情勢と中東のムスリム同胞への協力を呼びかけた [Hasan 1986: 263]。さらに、27 日にダッカにてパキスタン民主運動の講演を行い、6 項目要求を再び批判し、これに対抗するパキスタン民主運動の 8 項目統一綱領への支援を呼びかけた [Hasan 1986: 263]。12 月 1 日には、チッタゴンにて講演を行い、パキスタン民主運動の活動、民主制とイスラーム制の両立について演説した [Hasan 1986: 263-264]。

2-4. 暴動と最後のベンガル渡航（1968 年 2 月～1970 年 7 月）

七度目の東パキスタン渡航は、前回の渡航からわずか 3 ヶ月後、1968 年 2 月 21 日からの 2 週間であった[7]。東パキスタンの学生運動は同年からすでに過激化していた。マウドゥーディーは 2 月 24 日[8]にノアカリで、2 月 26 日[9]と 3 月 1 日[10]にダッカにて講演を行った。

八度目の渡航となった 1969 年 6 月 14 日からの 2 週間の滞在では、ダッカの JI 会合で、現政権との戦い、民主制の導入、ヒンドゥー教徒との分割統治の必要性、ハイダラーバード藩王国のムスリム支配について講演した [Hasan 1986: 317-318]。翌 15 日にもダッカにて講演し、

---

[5] 内容は次のとおりである。1）ラーホール決議にもとづく連邦制と成人普通選挙による議会民主制を確立する、2）連邦政府の権限は国防・外交・通貨に制限する、3）通貨制度は、東西両州が別個の通貨をもち自由交換制とするか、単一通貨の場合は別々の準備銀行を設け移転を規制する、4）財政は州に委ね、連邦政府は国防・外交に必要な資金を確保する、5）外貨は州が管理し、外国援助・貿易は連邦・州政府の協議事項とする、6）州は独自の軍隊か準軍隊をもつ [加賀谷・浜口 1977: 261]。

[6] この頃の東パキスタンの JI の党員数は 381 名とされる [Jīlānī 1995: 42]。

[7] 1968 年 2 月第 2 週にもマイメンシンにて講演を行う予定であったが、膝の痛みのために取りやめている [Jīlānī 1995: 25]。

[8] 内容は民主運動の重要性とその計画について [Jīlānī 1995: 39]。

[9] 内容は国民の強化と団結について [Ḥijāzī 2008: 34-38]。

[10] 内容はイスラーム復興と学生について [Ḥijāzī 2008: 48-54]。

預言者ムハンマド、アッラー、地域ナショナリズム、イスラームの正義、ムスリムの衰退について話した [Hasan 1986: 318-320; Jīlānī 1995: 58-62]。

1970 年には、二度ベンガルに渡航している。通算九度目になる 1 月の渡航では、JI の集会を妨害する事件が起きた。到着日の 1 月 17 日[11]にはダッカのエデン・ホテルにて、イスラーム学生連合の集会での講演し、イスラームの連帯について説いた [Aḥsan 1971: 13]。翌 18 日にも、同じくダッカにて集会が予定され、10 万人を超える聴衆が集まっていたが、マウドゥーディーが入場する直前に暴動が起きたため、講演をせずに会場から引き返した [Hasan 1986: 359-360]。1 月 20 日にダッカの JI 党員に対する講演を行い [Aḥsan 1971: 13-14]、翌 1 月 21 日に帰国した。

最後のベンガル渡航となったのは、1970 年 6 月 28 日から 7 月 3 日の滞在である。マウドゥーディーは、ダッカの JI 議会にて議長を務め、講演を行った [Hasan 1986: 375]。

1971 年 12 月 16 日にダッカが陥落し、東パキスタンはバングラデシュとしてパキスタンから独立した。翌年 1972 年には体調不良を理由に、マウドゥーディーはアミールの職を辞して、『クルアーンの理解』の執筆に専念する旨を伝えた [Badri 2003: 499]。バングラデシュとなった同地を再び踏むことはなく、アメリカでの闘病の末、1979 年に 76 歳で永眠した。

3. ベンガル文化に関する発言

これまで、マウドゥーディーの東パキスタン渡航への渡航歴をまとめてきた。この章から、マウドゥーディーが特定のテーマについてどのような発言を行っていたのか明らかにする。

マウドゥーディーは、ウルドゥー語の他に、英語とアラビア語を介していたとされる [山根 2001: 168]。ベンガル語の能力はなく、初めて訪れたダッカではベンガル人を前にウルドゥー語で講演することを遺憾に思うと述べた [Hasan 1984: 492]。

本章では、ベンガル文学、ベンガル語など、ベンガル文化、ベンガル社会と宗教に関する発言を抜粋する。なお、本稿での文学とは、小説や詩に限らず、宗教書や説教書など広く書かれたものを指す。[12]

3-1. ベンガル文学

マウドゥーディーはベンガル文学について、以下のように述べている。

3-1-1. ベンガル文学において、よりイスラーム的内容を取り入れる必要がある（ボリシャルの講演の要旨、1956 年 2 月 10 日） [Hasan 1984: 497]

---

[11] この時はダッカ空港での出迎えも少なく、ゲートは閑散としていた [Jīlānī 1995: 121]。

[12] 以下の引用の原文は、5-1-4 を除き、基本的にすべてウルドゥー語で書かれており、本稿でもウルドゥー語から日本語に翻訳している。[Hasan 1984; 1986]からの引用は、英訳されたウルドゥー語を日本語に訳しているが、雑誌や新聞、インタビューなど、初出が明らかな場合は極力ウルドゥー語の原文を確認している。

3-1-2. ベンガル語において、イスラーム文学を推進する大規模な手配が必要だ。そしてあらゆる階級や需要に沿う形で、その思想的な栄養を共時的に届けられるようにすべきだ（ダッカの講演、1956 年 3 月 2 日） [Aḥsan 1971: 42-43]

3-1-3. 東パキスタンのムスリムはイスラームに献身的だ。ただし、人口の 25%を占めるヒンドゥー教徒が経済力・権力を握っており、特に教育部門でその傾向が顕著だ[13]。出版市場ではインドから輸入したベンガル文学が溢れており、ベンガル民族主義も見受けられる（東パキスタンから帰国直後のラーホールの記者会見、1958 年 3 月 21 日）[Hasan 1986: 40]

このように、マウドゥーディーは、ベンガル文化のイスラーム化の必要性、インドの影響の排除を指摘している。

3-2. ベンガル語

1947 年 11 月に当時の暫定首都カラーチーで開かれた教育会議において、パキスタンで教育と言語に関する最初の声明が出された [PEC 1948: 43]。この時ウルドゥー語が必修科目とされたため、ベンガル語を主な母語とする東ベンガル州や、英語を第一言語とするエリート層からの反発を招いた [Rahman 2002: 67, 71]。翌年に発表された教育言語の方針は、初級学校では各地域の母語で学習を開始し、5・6 年生からウルドゥー語を導入、高等教育では英語を使って教えるというように、段階的に教育言語を使い分けるものであった [Rahman 2002: 9]。

ベンガル語を話すベンガル人は、東パキスタンにのみ集中していた。一方で、政府官僚や裁判官、警察、軍隊といった重要なポストの殆どはパンジャーブ州が占めており、東パキスタンの住民の間に不満が高まっていった。

1948 年 3 月には、東ベンガル州でベンガル語国語化運動が学生によって組織されだした [加賀谷・浜口 1977: 197]。これを皮切りに、東ベンガル州の各地で住民が団結し、州自治要求を訴えるようになった [加賀谷・浜口 1977: 198]。

マウドゥーディーは、「ムスリムのウンマの原則として、我々をお互いに繋げるのは、肌の色、血統、言語、出身地ではなく、神と預言者への信心である」（ダッカのエデン・ホテルにて、イスラーム学生連合の集会での講演） [Aḥsan 1971: 13]と述べており、ムスリムの紐帯を特定の言語に依存することを忌避している。一方で、1956 年 1 月 30 日のシレットの講演など、ベンガル語を国語とする東パキスタンの人々の要求は支持を表明しており、東パキスタンの一部の政治指導者が国語化要求をパキスタンの東西の問題として悪用していると批難していた [Hasan 1984: 493]。

[13] 教育現場については、東パキスタン訪問の経験や報道だけでなく、自身の娘フメイラが東パキスタンに嫁いでジェソールの女子校で教鞭をとっていたため [Ḥumairah 2012: 84-87]、彼女からも情報を得ていたと思われる。

3-2-1. ベンガル語も国語とするべきである。世界には国語に複数の言語を採用している国が多数ある（コミラの講演の要旨、1956 年 2 月 1 日） [Hasan 1984: 494]

3-2-2. もともと、東パキスタンではウルドゥー語に対して何の偏見もなかった。それどころか、知識人はこの言語の重要性や有用性を理解していた。ここでは、ウルドゥー語を話せる人は一般の人々からとても尊敬された。そして現在まで、ウルドゥー語はアラビア語に次いで宗教的に神聖な言語とみなされている。しかしこれ（筆者注：ウルドゥー語）を国語と公用語に制定することについて、この地の人たちは難色を示している。この地では、学のある人でもこの言語をあまりよく知らないためだ。もしこの言語が国語と公用語になった場合、行政面の障壁だけではなく、あらゆる場面でウルドゥー語を母語としている人々や、ウルドゥー語を読み書きする長い伝統のある人々から後れを取ってしまうのではないかと懸念されている。それゆえに、ベンガル語を公用語にしようという要求が持ち上がってきた。この出来事の本質をわかっている人は、即座に要求を認めた。しかし、一部の人はこの要求を埋もれさせ、西パキスタンから立て続けに否定の声があがってきた。このため、ベンガル語要求は単なる行政問題の枠を飛び越え、信念や感情の問題となった。ある現実的な要求に対して「あげません」と返答されたら、「勝ち取ってみせる」という声がより大きくなるのは当然のことだ（ダッカの講演、1956 年 3 月 2 日） [Aḥsan 1971: 27-28]

1956 年の第一次憲法では、東パキスタンに配慮した形で、ウルドゥー語とベンガル語が国語に指定された。アイユーブ政権下の「生徒の福祉と問題のための委員会」でも、ベンガル語を含めた母語言語とウルドゥー語を教育言語として共存させる方針がとられた [Aly 2007: 79]。

マウドゥーディーの発言からは、ベンガル語の国語化を支持していたものの、この問題をナショナリズムや民族主義運動の材料にされたことへの批判が伺われる。

3-3. ベンガル社会とイスラーム

東パキスタンの民族と社会、宗教について、マウドゥーディーは以下の様な諸問題を取りあげている。

3-3-1. 東パキスタンの状況は、あなた方もよくご存知であろう。二百年来、この地のムスリムはイギリスとヒンドゥー教徒の共謀によって踏み潰されてきた。ここでは、人生のあらゆる場面でヒンドゥー教徒が持てる者だった。商売を牛耳っていた。工場や工業の主だった。ムスリムは彼らの下で肉体労働者や職人として働くしかなかった。政府の重要な職は、ほとんどヒンドゥー教徒で占められていた。そして地主も彼らだった。ムスリムは彼らの小作人であり、それ以上のものが与えられることはなかった（ダッカの講演、1956 年 3 月 2 日） [Aḥsan 1971: 20]

3-3-2. もうひとつの東パキスタンの不満は、この地域の発展に敬意が払われていないということだ。中央政府はこの地域から得た収入を、この地には極端に少なく、西パキスタンにばかり配分してきた（ダッカの講演、1956 年 3 月 2 日） [Aḥsan 1971: 29]

3-3-3. 東パキスタンでも西パキスタンでも、共産主義者の影響はもともとさほど大きくなかった。社会への不満も、西側と比べて多くはなかった。しかし 2 つの理由から、この地に付け入る機会を与えてしまったのだ。まず、彼らの理論に対抗できるだけの十分なイスラーム文学やイスラーム運動組織がなかった。ふたつめに、政府が彼ら（筆者注：共産主義者）を投獄した際、ムスリム連盟に不満を抱いていた若者も捕まえて押し込んでいたことが、彼らに好都合だったのだ。刑務所の小部屋はコミュニストの寺子屋になった。そして真面目で純朴なムスリムの若者が共産主義者に仕立て上げられるか、少なくとも共産主義に影響を受けて出てきた。後に共産党が禁止されても、共産主義者は絶滅せず、様々な政党のなかに入り込み、彼らの主張を展開しはじめた。今日ではベンガル民族主義のマントをまとい、この地の人々の不満を高め、パキスタンの東と西を永遠に分断しようとしている（ダッカでの講演、1956 年 3 月 2 日） [Aḥsan 1971: 30-31]

3-3-4. 高度に重要な指針のひとつとして、東パキスタンの防衛に関して大至急自給体制を打ち立てなければならない。なぜならこの地域の住民には自由の保障と生存への信頼が足りていないのである。彼の地の若い兵士たちが入隊の一歩を踏み出していないことは言い訳にならない。もし兵士が増えないというのなら、彼らを激励し、興味を抱かせ、鼓舞するのが人々の義務であり、国の防衛のための責任である。ベンガルの若者に軍隊への貢献の関心を高めるために、大規模なプロパガンダを打ち出す必要がある。少なくとも、200 万人の若者に軍の訓練を施さなければならない。国境に近いすべての集落の防衛を準備させる必要がある。この地域は四方がインドに囲まれており、もしそれを怠れば、緊急時に自衛できない（JI の行動指針） [Gīlānī 1974: 350-351]

3-3-5. ベンガル人ムスリムは東パキスタンに住む（筆者注：ベンガル人以外の）他のムスリムを惨めとみなしている。インドのムスリムはパキスタンを建国するために重要な役割を果たした。もしもパキスタンがムスリムへの扉を閉ざしたら、それはパキスタンの理念に対する裏切りだ。パキスタンの敵は、ムスリムの間に亀裂を作ることでパキスタンを弱めようとしている。東パキスタンのムスリムは、そのような罠に嵌ってはいけない。パキスタンはイスラームの名のもとにつくられ、もちこたえてきた。もしもパキスタンのムスリムの間で分裂が起きれば、それは国家の脅威となろう（ダッカの講演、1969 年 6 月 15 日） [Hasan 1986: 318]

3-3-6. この国の様々な地域をつなぎあわせ、ひとつの国を作るためにもイスラームは不可欠であり、他の方法はない。ここにイスラーム以外の体制を導入しようとするならば、途端にベンガル人はベンガル人だけになり、パンジャーブ人はパンジャーブ人で固まり、

パターン、スィンド、バルーチといった諸要素はみな分裂するだろう（雑誌 *Ā'īn* に掲載されたインタビュー、1969 年 7 月） [Nu'mānī 1993: 22-23]

3-3-7. 私の意見では、東パキスタン陥落の根本的な原因は、パキスタンがイスラームとイスラームの祖国という青写真をもとに作られた事実を強化し、堅固なものにする努力をパキスタン建国の初日から逃避していただけではなく、その根を日々弱らせていたことにある。そして、敵には恒常的にその根を刈り取らせる機会を与えていた。東パキスタンには、ヒンドゥー教徒の人口が多く、十分な権力も保持していた。彼ら（筆者注：ヒンドゥー教徒）はパキスタンの建国を全く喜んではおらず、この国を終わらせるための正当な機会を手放そうとしなかった。ムスリムの学のある若い層には、彼らの学生がたくさんいた。若者の脳は、ヒンドゥー教徒の教師の教育と、ヒンドゥー教徒の作家のベンガル文学から全面的に影響を受けていた。インドも東パキスタンがパキスタンの弱点だということを知っており、パキスタン建国の理論である二民族論に、安々と屈辱を与えることができると考えた。この目的のため、パキスタン建国の直後より、カルカッタから二民族論を根絶させるような書籍が雨後の竹の子の如く出版され始めた。彼らはベンガル語を基盤に、ベンガル人ムスリムとベンガル人ヒンドゥー教徒をあわせてひとつの国を作り、非ベンガル人ムスリムや西パキスタンに対しては嫌悪の毒を広めようとしていた（1972 年 12 月 9 日発行の日刊紙 *Jasārat* における「東パキスタン陥落の根本的な原因は何か」という質問への回答、1972 年） [Abū Ṭāriq 1976: 513-514]

3-3-1 や 3-3-2 からは、マウドゥーディーが東パキスタンの社会問題について、ヒンドゥー教とイスラームという宗教問題に限らず、ジュートの収入に起因する東西パキスタンの経済格差や、ザミーンダーリー制における小作人と地主の関係などにも焦点を当てていたことがわかる。また、東パキスタンの防衛政策にも触れている (3-3-4)。3-3-5 では、東パキスタン内部における、ベンガル人対その他のムスリム・エスニシティという対立構造が顕在化していることに対して、警鐘を鳴らしている。

4. 東パキスタン独立運動に関する発言

本章では、東パキスタンがどのようにしてその社会問題を顕在化していき、州自治権拡大につなげていったのか、独立運動のプロセスに関するマウドゥーディーの発言をまとめる。

ベンガル人の自治権拡大運動は、ベンガル語の公用語化要求という形で学生を中心に展開された。1952 年 2 月 21 日には、警官による学生への発砲事件をきっかけに、東ベンガル州内で暴動が起きた。1953 年には、州内の政党の寄り合いである「統一戦線」が結成され、翌年の選挙にて、237 議席中 215 議席獲得し、第一党となった。1956 年には、憲法でベンガル語もウルドゥー語と並んで国語指定されたことにより、言語に関しては満足し、運動はいったん収束したかに見えた [Rahman 1998: 94-95]。しかし政治面では依然西パキスタンとのわだかまりが残り、ベンガルにおける州自治権拡大運動が継続した [浜口 1991: 245]。

1970 年の総選挙で第一党となったアワミ連盟は、西パキスタンに対し、東パキスタンの自治を要求した。1971 年 12 月、東パキスタンを支援するインドとパキスタンの間で、第 3 次印パ戦争が勃発した。敗戦したパキスタン軍は無条件降伏し、東パキスタンはバングラデシュとして独立した。

4-1. 自治権拡大運動

まず、東パキスタンの独立運動について、その発言をまとめる。独立運動は先のベンガル語の国語化要求を皮切りに、次第に東パキスタンの自治権拡大運動へと発展し、最終的にパキスタンからの独立を目指すようになった。

4-1-1. 悪意を持つ者達が、すでに東パキスタンに入り込んでいる。ムスリムをムスリムと対立させているのだ。現在、東パキスタンの分離が公然と話されるほどになった。そして国外にまで、パキスタンがよもや 2 つに分裂するのではという懸念が漏れ伝わっている（ダッカでの講演、1956 年 3 月） [Gīlānī 1974: 248]

4-1-2. 政府の失策により、東パキスタンでは不満が高まっており、人々は独立を口にしている。世論を弾圧することはなんの解決にもならず、分離のための地下運動を生み出すだけで、より危険だ。この国の両翼を保つ方法は民主制にほかならず、民主的な方策でのみ東パキスタンの苦情が解決されるだろう（パキスタン・ハイダラーバードの講演、1968 年 3 月 19 日） [Hasan 1986: 266-267]

4-1-3. 破壊工作分子が今、国の中でうごめいている。パキスタンがひとつの国であり続けるかどうか、そして議会の中ではなく外でイスラーム制を保てるかどうか。私があなた方にお伝えしたいのは、軍ですらこの国をひとつに保つことはできないということだ（選挙権を持つ一般向けの演説、1970 年 10 月） [Gīlānī 1974: 250]

4-1-4. パキスタンはひとつの国として建国され、ひとつの国であろうとし続けてきた。数百万のムスリムが犠牲を払ったのは、建国からわずか 23 年でふたつの国に別れるためではない。このままでは、インド・ムスリムの偉大なる政治闘争史が悲劇に転落してしまう（1971 年 3 月） [Gilani 1984: 227]

4-1-5. 東パキスタンには、数十万の人々の内、神の御加護でイスラームを信仰する者がいる。…中略…極度に厳しい状況下でも、多くの人々が自らの危険を顧みず、非ベンガル人ムスリムを救ってきた。しかし、非信仰者とともにムスリムに暴虐を働いてきた者達は、決してムスリムと名乗る資格はない。…中略…ムスリムがムスリムの命をとることは、ハラームである。暴虐への復讐は、圧制者にのみ返すべきである（東パキスタン、西パキスタン双方のムスリムに宛てた声明、1971 年 4 月 30 日） [Aḥsan 1971: 118-119]

4-1-6. ダッカであの（筆者注 : 1970 年 1 月 18 日、JI の集会が襲撃された）惨事が起きた時、東パキスタンは助からないだろうとわかっていた。私たちの集会が襲われたからこう言うのではなく、襲撃してきた者達に当局の息がかかっていたからだ。そこでは分離主義が運動という形で芽生えていた。当局の支持を得たとなれば、結末は明らかだった。上の権力者は無力か汚職にまみれている。もはや東パキスタンが助かるのは困難だと理解した。むろん、7 千万人のムスリムが破滅に進んでいると考えると、安らかな心境にはなれなかった（日刊紙 *Ittiḥād* のインタビュー、1972 年） [*Sayyārah* 1980 April-May: 428]

4-1 からは、国語化要求を支援していたマウドゥーディーの、独立運動に発展することへの危機感が読み取れる。さらに 1968 年 1 月の時点では、かなり強い危機感を持っていたことがわかる (4-1-2)。4-1-3 や 4-1-4 では、パキスタンの理念であるイスラームの紐帯を、東パキスタンにおいても確認している。

4-2. ムジブル・ラフマンの 6 項目要求

1966 年 1 月 7 日、アワミ連盟委員長のムジブル・ラフマンが 6 項目要求を発表した。これは、外貨を州で管理するなど州の財政を中央政府から切り離し、かつ州独自の軍隊を保持するなど、独立の足がかりとなるような内容であった。マウドゥーディーは、この綱領に対し、即座に反応している。

4-2-1. 現在東パキスタンで起きていることは、この地の行方を示している。政府による失策が危機を引き起こした。…中略…東パキスタンの混乱は 2 つの原因に根付いている。まず、東パキスタンの人々の不満はパキスタン政府への不満であり、これはある程度的を射ている。さらには 1962 年憲法下で、彼らが権力からの疎外感を持ったことにある（6 項目要求が発表された翌日の声明、1966 年 1 月 8 日）[Hasan 1986: 220]

4-2-2. ムジブルの 6 項目要求は国とイスラーム共同体に不利な結果をもたらすであろう。これは敵のパキスタン侵略のために戸口を開けるようなものである（1966 年 2 月 20 日付日刊紙 *Jang* に掲載された講演録、講演日は 1966 年 2 月 18 日）[Aḥsan 1971: 61-62]

4-2-3. 私たちは、東パキスタンに公正を求めるのであって、分裂ではない。シャイフ・ムジブル・ラフマン氏の提案したスキームの特徴は、あたかも 2 つの国家が存在していることだ。私たちは、これを何よりも東パキスタンにとっての脅威と考えている。国外勢力は、東パキスタンから中国まで、軍隊の通り道を得るために（筆者注：この要求の可決を）待望している（6 項目要求に関する質問への回答、雑誌 *Ā'īn* に掲載、1966 年 3 月 9 日） [Aḥsan 1971: 62-63]

4-2-4. 6 項目要求の賛同が広まることの結末が国家の崩壊だと、弛まぬ努力の末に東パキスタンの人々にもわかってもらえた。国家の安全保障と同盟が守られることによって、苦境

は除去されるということも共有された。彼らはパキスタン民主運動の 8 項目統一綱領にも合意した（グジュラーンワーラーの講演、1968 年 11 月） [Ḥijāzī 2008: 31]

4-2-5. 東パキスタンにおいて、6 項目要求の影にパキスタンの精神は急速に弱まっており、国際的な陰謀に陥りやすい状況だ。東パキスタンに平穏が訪れなければ、第二のベトナムやカンボジアとなるだろう（東パキスタンから帰国直後のラーホールでの報道会見、1970 年 7 月 4 日） [Hasan 1986: 376]

また、1971 年に入ってから、ムジブル・ラフマンに対して直接電報を送っている。

4-2-6. ここ数週間に巻き起こった出来事は、国を深刻な危機によって分裂させています。そしてどこよりも巨大なムスリム国家であるパキスタンが、急速に悲劇に向かって雪崩れています。これは、イスラーム統治下のスペインの悲劇よりも更に悲惨なものとなるでしょう。このような時には細心の注意を払い、よく考えて行動する必要があります。不幸にも国会の招集が延期されるか、事態が展開してしまうならば、どうか状況を悪化させないよう尽力してください。パキスタンのイスラーム性とその存在は、どんな個人の感情よりも優先されます。そのため、貴方は今の危うい状況をじっくり考え注意を払いながら動くべきで、また国の崩壊という責任を貴方が負うような羽目にならないよう要請します（ムジブル・ラフマンに宛てた速達電報、1971 年 2 月 25 日） [Jān 2011: 275]

マウドゥーディーは、ムジブルと彼の 6 項目要求が国家の崩壊を招くと強く反発しており、一貫して反論を続けていた。一方で、中央政府の東パキスタン政策の失策を認めており、東パキスタンの要求に同調を示してもいる (4-2-1)。6 項目要求に対抗して、マウドゥーディーを含むパキスタン民主運動が 8 項目統一綱領を提示したものの (4-2-4)、6 項目要求を上回る支持は得られず、独立につながっていった様子が見受けられる (4-2-5, 4-2-6)。

4-2-3 の国外勢力とはインドのことを指していると考えられ、1962 年に起きた中印国境紛争を踏まえての発言と思われる。

4-3. 選挙

東パキスタンが争点となった選挙は、1954 年と 1970 年に行われた。どちらもヒンドゥー教徒の住民とムスリムの住民をわけない合同選挙であった。1954 年の東ベンガル州議会選挙では、反ムスリム連盟・反中央政府が唱えられ、ベンガル語の国語化が争点のひとつであった。統一戦線がムスリム連盟を破って圧勝し、ムスリム連盟は西パキスタン諸州だけに勢力を保つ地方政党となり下がった [加賀谷・浜口 1977: 200-201]。

ヤヒヤー新軍事政権の 1970 年の国民議会・州議会選挙では、イスラーム社会主義を掲げた Z. A. ブットー率いる PPP がパンジャーブ州、スィンド州で大勝した [山中 1992: 75]。東パキスタンでは、6 項目要求を掲げたムジブル・ラフマンのアワミ連盟が圧勝した。1970 年の総選挙では、他の宗教勢力と同じく JI も大敗し、国民議会と州議会でそれぞれ 4 議席を獲得するにとどまった [加賀谷・浜口 1977: 295-296]。

4-3-1. さて、パキスタンで合同選挙を遂行することによってどのような終幕があり得るかという質問に答えよう。間違いなく近い将来、パキスタンにはひとつではなく、少なくともふたつの国が芽生えて幕切れになる。ついにはパキスタンの唯一性の終焉となるだろう（合同選挙の問題点についての声明、1957 年） [Gīlānī 1974: 248]

4-3-2. 合同選挙制にもとづいて行われる選挙では、分離を要求するベンガル民族主義を掲げる者に、東パキスタンを委ねることになる。彼らはベンガル連合のために努力を惜しまない、世俗的で熱狂的な集まりである。彼らの多くは中央政府議会にも進出してくるであろう。やがてパキスタンは彼らの手による分割から逃れられなくなる（合同選挙制についての声明、1957 年 12 月） [Gīlānī 1974: 248-249]

4-3-3. この国には、一刻も早く自由で公平な手段の普通選挙の開催が必要だ。それだけが市民にとって、現在の失敗した政治指導者たちの替わりに、より良い指導者を得られる手段だ。しかし、普通選挙の必要性よりも輪を重ねて重要な選挙の形式の問題を、この委員会で選挙の前に決議しなければならない。…中略…今の（筆者注：合同）選挙制度下では、（筆者注：イスラームを基盤とした）パキスタンの憲法は危険にさらされている（JI の委員会の講演、1957 年 12 月 30 日） [Aḥsan 1971: 53-55]

4-3-4. この選挙でもし急進主義者らが選出されたとしたら、パキスタンを分裂させ、さらに粉々にするために、動き出すだろう（1970 年 1 月） [Gīlānī 1974: 249]

4-3-5. 特に東パキスタンにおいて、（1970 年の）選挙は全く公平ではなかった。ムジブル・ラフマンのアワミ連盟は、選挙において自由に強奪や暴虐を振りかざすことができた。あらゆるところに圧力をかけていた。各地の投票所で他の政党への投票者の入場を阻止した。投票箱に放火する事件も起きた。運営テントも破壊された。ムスリム男性は、投票のために女性を家から出すこともほぼなかった。意思の高い人でさえ反乱を止める気にすらさせない空気であった。これと真逆に、ヒンドゥー教徒の女性は蟻の行進のように長い列を作って投票所に並んでいた。このような策略があったのに、正しく公平に投票が行われたというのか。ムジブル・ラフマンに反対する人民の真の意思表明など全く不可能であった（ラジオ・パキスタンのインタビューにて 1970 年の選挙の公平性に関する質問への回答[14]、1975 年 4 月 18 日） [*Tarjumānulqurʾān* 1980 October: 39-40]

---

[14] この回答に続いて、選挙における法整備について次のように述べている。「私たちは贔屓なく、公正で、自由な選挙にするための法律を制定することを望んでおり、提案書も出した。そのなかには、選挙に勝つための卑怯な工作を禁止し、このような工作をして投票する者は、投票所からつまみ出せるような配慮が盛り込まれていた。さらには、アメリカから学んだ法律も採用されている。すなわち、ある政党の候補者が、他の政党の候補者に対し虚偽の罪を着せて悪評を流した場合、その事実関係を証明する必要があり、証明できなければそうしてでも選挙に勝とうとした候補者の得票を無効にするものである」（ラジオ・パキスタンの

これらの発言から、マウドゥーディーが合同選挙という選挙制度そのものへの不満を強めたいた事がわかる (4-3-1, 4-3-2)。そしてこれは一方で、制度が整っていることを前提に、マウドゥーディーが選挙という政治制度を強く信頼していたことの現れとも見ることができよう (4-3-3)。

4-4. 国際社会への訴え

マウドゥーディーは、東パキスタンの独立を阻止すべく、国内外に向けて発信を続けていた。彼は 1956 年の国際イスラーム会議、1957 年のラーホールで行われたイスラーム・コロキアム、1962 年のイスラーム世界連盟などに関わっており、当時から国際的な認知度が高かった。東パキスタンの独立が確実視されるようになった 1971 年 4 月には、イスラーム世界連名や各国首脳らに向けて支援を呼びかけている。

4-4-1. インドは公然とパキスタンの内政に干渉してきています。また、東パキスタンでは侵略的手段で反乱や暴動を引き起こしています。イスラエルのみがその政策に賛同しています。その証拠に、ヒンドゥー教徒とシオニストの陰謀は、常に世界各地のムスリムの諸問題に取り組んできた最大のムスリム国家パキスタンを粉々にしようというものなのです。貴方と貴方の政府に私から要請したいことは、この状況の深刻さに注意を払ってほしいということです。そして、国際法と洗練された態度をもって、この酷い違反を阻止するべく、有効な行動をとっていただきたいのです（21 のイスラーム諸国宛に発送した電報[15]、1971 年 4 月 1 日） [Aḥsan 1971: 122-123]

4-4-2. インド軍、火器類、ゲリラ。あらゆる手段で東パキスタンを分離させようという運動が支援されています。この目的のため、（筆者注：西）パキスタンについて悪質で誤ったプロパガンダが流されています。彼らは正義と公正、外交上の文明的マナーを無視しています。彼らは極端に厚かましく、厚顔無恥にもパキスタンの内政に干渉しています。シオニストが、最大のイスラーム国家であるパキスタンを解体するため、インドの支援をしています。なぜなら、パキスタンは世界各地でイスラームの同胞意識や国際正義の原理のために、ムスリムの立場を支援しているからです。私は全イスラーム世界にパキスタンへの支援を要請します。インドの侵略を強く批難することを要請します。そして、

インタビューにて 1970 年の選挙の政府の役割に関する質問への回答、1975 年 4 月 18 日） [*Tarjumānulqurʾān* 1980 October: 40]。

[15] この電報は、トルコ、ヨルダン、エジプト、サウディアラビア、モロッコ、カタル、クウェート、UAE、チュニジア、アルジェリア、マレーシア、イラク、リビア、シリア、イエメン、イラン、アフガニスタン、モーリタニア、インドネシア、スーダン、バハレーンの首脳宛に送られた [Aḥsan 1971: 123]。このうち、イエメン（電報）、モロッコ（書簡）、カタル（書簡）などから、賛同する内容の返答が寄せられた [Aḥsan 1971: 127-130, 135-136]。

この義務を遂行するようイスラーム世界連盟に要請します（イスラーム世界連盟事務局長に宛てた電報[16]、1971 年 4 月 2 日） [Aḥsan 1971: 124]

4-4-3. 今、パキスタンが危機的な事態にあることは、すでに貴方のお耳に入っているかと思います。インドはパキスタンの内政に干渉しているのです。インド軍の訓練された武装兵士が、私たちの国境を越えて破壊活動と平和の壊滅計画に公然と乗り出しています。さらに驚くべきことは、ユダヤ教徒と東パキスタンの帝国主義諸勢力、インド政府が共謀してパキスタンの国内問題を生み出し、パキスタンを破壊しようとしているのです。…中略…東パキスタンでは、独立運動が一年ほど前から続いており、インドが内部でこの運動の手を引いています。…中略…これは明らかに陰謀です。この縦糸と横糸はすべてイスラームに敵対する勢力が共謀して編み出しています。今、パキスタンに攻撃を仕掛け、我が国を消滅させようと目論んでいるのです。インド国民議会の決議は、インドの邪心と侵略的意図を覆い隠しています。…中略…パキスタンは、常に世界各地のムスリムの諸問題に取り組んできました。特に、パレスチナ問題では、23 年間にわたってアラブの支援を続けてきました。もはやシオニズムはパキスタンの敵と断言できます。アメリカは全面的にシオニズム世界の影響下にあり、すなわち、この陰謀にはアメリカの財力も絡んでいます（各国の著名人に発送した 39 通の手紙[17]、1971 年 4 月 13 日） [Aḥsan 1971: 124-126]

4-4-4. インドがよく練られたスキームによって、東パキスタンの分離に恒常的に働きかけていたことは、初めから明らかであった。東パキスタンのヒンドゥー教徒と、ヒンドゥー教徒に影響を受けたムスリムは、道具にされていた。あとからアメリカとイギリスが関心を持つようになり、数年間働きかけた。最後にロシアが来た。…中略…そして世界のシオニストらは、パキスタンがアラブを支援していることへの罰を課すため、裏幕にいた（1972 年 12 月 9 日発行の日刊紙 *Jasārat* における「東パキスタンの悲劇の裏には国際的な陰謀があったのか」という質問への回答、1972 年） [Abū Ṭāriq 1976: 523]

これらの手紙の中では、シオニストによる陰謀論に言及している。脈絡なくシオニストの話題が出てくるのは、イスラーム世界、特にアラブ世界において関心の高いパレスチナ問題へ関連付けることで、東パキスタン問題に注視してほしいということであろう。イスラーム

[16] この電報に対し、事務局長から返答の書簡が届いた。また、サウディアラビアの新聞、ラジオ、テレビでコメントが報道された [Aḥsan 1971: 134-135]。

[17] この手紙は、イエメンのカーズィー・アブドゥルラフマーン、モロッコのアブーバクル・カーディリー、パレスチナの大ムフティー、ムハンマド・アミーン・フサイニーをはじめとする、セネガル、ナイジェリア、フィリピン、サウディアラビア、トルコ、エジプト、レバノン、スイス、ヨルダン、カタル、クウェート、シンガポール、マレーシア、インドネシア、マリ、シリア、スリランカ、モーリタニア、ビルマ、イラク、スーダン、ソマリアの著名人らに発送された [Aḥsan 1971: 125, 127, 128, 136]。

世界各地の著名人に熱心に訴えたものの (4-4-1, 4-4-2, 4-4-3)、これらの声は届かず、東パキスタンは西パキスタンから分離の道を選んだ。

5. バングラデシュ独立後の発言

これまで、東パキスタンの選挙や独立運動について、主に同時代的な発言を取り上げてきた。マウドゥーディーらの抵抗も虚しく、1971 年 12 月 16 日に東パキスタンはバングラデシュとして独立した。独立に先駆けて 12 月 6 日にインドがバングラデシュを承認し、翌 1972 年 11 月にはバングラデシュが国連に加盟した。この章では、バングラデシュ独立後の状況を含め、その回想録に焦点を当てたい。

5-1. バングラデシュ承認

1971 年 12 月にバングラデシュが独立した後、残された西側パキスタンにとって、最初の争点はバングラデシュを国家として承認するか否かであった。長い議論の末、パキスタンは 1974 年 2 月の第 2 回イスラーム諸国会議にてバングラデシュを相互承認した。

5-1-1. （筆者注：1972 年 7 月の）シムラー会議に出発する際、ブットー氏はバングラデシュの不承認を誓っていた。シムラーから帰ってくると、インドの地にいる間はバングラデシュを承認しなかったと苦々しく述べた。シムラーで繰り返し流されたインドの報道は、ブットー氏がバングラデシュを承認したと伝えている。ライヤルプルのブットー氏の演説[18]は、パキスタンの国益を過去最大に損ねた。演説で、東パキスタン独立はインド侵攻のせいではなく、東パキスタンの人々がパキスタンから分離を望んだ結果と述べたのである（ブットー政権によるバングラデシュ承認についての質問に対する声明、1972 年 10 月 29 日） [Hasan 1986: 420]

5-1-2. いわゆるバングラデシュを承認することは、パキスタンにとって全く益がない。それどころか損害が多い。しかし益・不利益という話は後にしよう。なにより、ある国の一部を国外の勢力が強制的に分割したとき、尊厳を踏みにじられた側の国がその分離を承認できるであろうか。…中略…イスラエルは現実になった。アラブ諸国はこれを無効とする力を持ち合わせていない。しかし 25 年間も承認していない。東ドイツも現実になった。西ドイツにはこの現実を変える力はない。しかし今に至るまで承認はしていない。台湾も現実だが、中国は承認する気がない（1972 年 12 月 9 日発行の日刊紙 *Jasārat* における「東パキスタンを承認することはパキスタンにとって有益か」という質問への回答、1972 年） [Abū Ṭāriq 1976: 526-525]

[18] 1972 年 10 月のライヤルプルでの演説から、Z. A. ブットー政権がバングラデシュ承認運動を開始した [Hasan 1986: 420]。

5-1-3. ハサナイン・ヘイカル氏[19]はパキスタン側の主張を聞かずに、インドのプロパガンダのみから判断している[20]。バングラデシュはインドの武力侵略の申し子であり、人々の意思でバングラデシュが建国されたというのは誤りである。…中略…ハサナイン・ヘイカル氏はその見識をもって、エジプト政府にバングラデシュを承認するよう助言し、パキスタンにも承認を進言したという。もしパキスタンがイスラエルを承認し、さらにアラブ諸国にも承認するように助言したとしたら、ヘイカル氏はどう対応するか熟考してほしい。もしアラブがアメリカの武力侵略の産物である国を承認できないのならば、アラブの指導者たちはどの口でバングラデシュを承認せよとパキスタンに助言できるのであろう（エジプトの新聞論説委員ハサナイン・ヘイカルによるバングラデシュ承認発言に対する声明、1973 年 2 月） [Hasan 1986: 432]

5-1-4. 貴方が「バングラデシュ」を承認することは、すべてのパキスタン人の国家尊厳や自尊心のひどくかき乱すでしょう。東パキスタンでの出来事は、「バングラデシュ」がインド軍によるむき出しの武力侵略の産物であり、パキスタンに対する外国からの酷い辱めの陰謀であると否定できません。彼の国を承認することは、彼の武装侵略を合法化することであり、パキスタンの半分と、いまだインドのヒンドゥー教徒や東パキスタンに潜むその代理人と雄々しくも戦っている数千万のムスリム男性、女性、子どもたちをみすみす手放すことを意味します。さらには、イスラーム会議に参加するどのムスリム国家の代表団も、2 万 6 千平方マイルの中東ムスリムの土地と、1 千万人に満たないムスリムの解放が達成できないと各国に報告する覚悟をしているのです。そこに武力でつくられたバングラデシュを承認することで、5 万 4 千平方マイルのベンガル・ムスリムの土地と、6 千万人のムスリムをインドのヒンドゥー教徒に明け渡すとなれば、会議はどうなるでしょう？　会議に参加する世界中のムスリムの面々を思い描いてみてください。もし 1974 年 2 月に、ラーホールでそのような悲劇が起これば、それは 1971 年 12 月のダッカ事変よりも不名誉なこととなるでしょう（Z. A. ブットーに宛てた電報、1974 年 2 月）[21] [Jān 2011: 93]

5-1-5. 東パキスタンは海外の武力侵略によって、パキスタンから強制的に切り離された。イスラーム諸国会議は、このような侵略を批難し、適切な行動をとるべきである（第 2 回イスラーム諸国会議に寄せた声明[22]、1974 年 2 月） [Hasan 1986: 441]

---

[19] 1957 年より、エジプトの大代表的な日刊紙 *al-Ahrām* の論説委員を務めた [伊能 2002: 60]。

[20] ハサナイン・ヘイカルは 1973 年 1 月からインドとバングラデシュを訪問しており、バングラデシュ承認の発言は翌 2 月上旬、パキスタンに到着した際に発せられた [Hasan 1986: 432]。

[21] この電報は英語で送られた [Jān 2011: 93]。英語原稿をマウドゥーディーが書いたのか、側近が翻訳したのかは不明である。

[22] この声明の中では、パレスチナ、カシュミール、教育、アラビア語、二重市民権、アフリカのムスリムに関して言及した [Hasan 1986: 441-442]。

5-1-6. 父（筆者注：マウドゥーディー）が家の中で悲しんでいることはよくありました。しかし、3 度だけ、本当にひどく心を痛めたことがありました。…中略…1971 年 12 月 16 日のダッカ陥落です。…中略…父は「東パキスタンは離別したことなどなかった。しかし、西パキスタンの権力者たちが押しやって分離させた。インドは漁夫の利を得たのだ」と言っていました。

1974 年 2 月、ラーホールでイスラーム諸国会議が開催され、サウディアラビアの国王ファイサル・イブン・アブドゥルアズィーズがとりわけて父のことを聞いてきました。そのため（筆者注：当時の首相）ブットー氏が父を会議に招待したのです。会議が始まり、父が会議場（パンジャーブ州議会ホール）の階段を登ろうとした時、会議ではブットー氏がシャイフ・ムジブル・ラフマンの目の前でバングラデシュの承認を宣言すると知ったのです。父はこう言い残して帰宅しました。「あのシャイフ・ムジブルはパキスタンを破壊する陰謀の駒だった。彼と並んで座るのは不可能だ」（マウドゥーディーの娘フメイラの回想録） [Ḥumairah 2012: 89-90]

このように、マウドゥーディーはバングラデシュを一国家として承認することを一貫して拒否していた。当時の首相であった Z. A. ブットーの責任に触れ、バングラデシュの独立を黙認したこと、さらに国家として承認することを強く批難している (5-1-1, 5-1-4)。実際の承認は、1974 年のイスラーム諸国会議の場で行われた。マウドゥーディーはこの会議を欠席しており (5-1-6)、かわりに声明文を送った (5-1-5)。バングラデシュの承認が、それだけ大きな問題であったことがわかる。

さらに、バングラデシュの承認に関して、4-2 で取り上げたムジブル・ラフマンへの言及も見られる。フメイラの回想録からは、マウドゥーディーがムジブルについて、独立後まで苦々しく思っていたことがわかる (5-1-6)。

5-2. 東パキスタン独立の影響

次に、バングラデシュが独立した後、残された西パキスタン側では、イスラームによる統一という建国のアイデンティティの葛藤が繰り広げられた。ここでは、バングラデシュの独立後のパキスタンに関する発言を収集する。

東パキスタンの独立にあたっては、1971 年 12 月 3 日から 17 日まで、第 3 次印パ戦争が巻き起こった。それに先駆け、1971 年 3 月より各地でバングラデシュ解放軍が形成されており、ダッカを中心に激しい戦闘が行われた [加賀谷・浜口 1977: 302-303]。12 月にはパキスタン・インドの両軍は全面戦争に突入し、東パキスタンでは 300 万人の死者が出たとされ、避難民は数百万人に上った [加賀谷・浜口 1977: 306, 330]。

5-2-1. インド軍が東パキスタンを占領してから、パキスタンはバングラデシュとのすべてのコンタクトを断たれた。このような状況下で、イスラームを愛するベンガル人および非ベンガル人ムスリムを苦しめた残虐な行為の詳細は入手できなかった。それでも、海外報道メディアや全インド・ラジオを通じて得られた報告から、イスラームを愛する人々を巻き込んだ蛮行の様子が十分に伝わってきた。インド軍の侵略以来、虐殺は

続けられ、イスラームを敬愛しているという以外に何の落ち度もなかった数千の人々が、死に追いやられた。…中略…かつてイスラームの地でありながら、ムスリムの殉教者の血とともに死んでいった東パキスタンの悲劇に深い追悼の意を示す。ムクティ・バヒニから届いた報道によると、バングラデシュの暫定政府がパキスタン系囚人を戦犯として裁判にかけようとしている。パキスタン政府は、イスラームを愛する人々の殺戮を防ぐために具体的な外交上の行動を起こすべきであり、国の義務として戦ったパキスタン系囚人たちの裁判を、バングラデシュ政府に断念させるべきである（バングラデシュにおける大量虐殺に対する声明、1972 年 1 月 2 日） [Hasan 1986: 409]

5-2-2. この悲劇において、イスラームを愛するベンガル人や非ベンガル人ムスリムを、バングラデシュのイスラームを根絶させようとするベンガル民族主義者の支配から逃れさせる責任は、パキスタン人に重くのしかかっていた。バングラデシュの新政府は、世俗主義、民主主義、社会主義の三原則を明確にした。イスラームに対する反乱の結果、バングラデシュはムスリムが大多数であるにもかかわらず、二級市民として扱われる地になっている。バングラデシュにおいてイスラームは個人の信条であり、知的分野は世俗主義が支配し、インドのムスリムと同じようにバングラデシュのムスリムの地位は急激に低下した（新聞記事、1972 年 1 月 30 日） [Hasan 1986: 410-411]

5-2-3. 当然のことながら、東パキスタンは以前も武力によってパキスタンに加わったのではなく、武力で再び一国に戻ることはありえない。第一に地理的な関係から、敵国インドの存在を越えて西パキスタンから軍隊を差し出すことはできない。第二に、私たち東パキスタンと西パキスタンは戦勝国と被征服地の関係ではなく、平等な兄弟である。自ら喜んで一緒になったものは、自らの意志でのみ再合流できる（1972 年 12 月 9 日発行の日刊紙 *Jasārat* における「再び東パキスタンと西パキスタンの合併は可能か」という質問への回答、1972 年） [Abū Ṭāriq 1976: 530]

5-2-4. スィンド州でスィンディー民族主義が芽生えだし、東パキスタンに追随しようとしている。ベンガル民族主義者がバングラデシュに抱いていたのと同じような地域的偏見が、スィンドでも見受けられる。東パキスタンと同様、スィンドでもヒンドゥー教徒とムスリムが結託し、スインド民族主義を唱えている。そして再び「ジャイ・スィンド運動」がインドによって支援されているのも、バングラデシュ運動の時と同じである。このようなスィンドの独立運動は脅威である。運動はすでに暴力や混乱を引き起こしており、国の将来にとって癌となるであろう（スィンドでの暴動に対する声明、1972 年 7 月 25 日） [Hasan 1986: 418]

5-2-1 は、バングラデシュの独立に際する被害者の死を悼むとともに、戦争裁判で元パキスタン系の運動家たちが裁かれることを懸念していることがわかる。この時の混乱は、2012 年以降、バングラデシュにおいて戦犯裁判という形で再び国内の火種となっている。5-2-2 では、ベンガル民族主義者をムスリムと区別する発言が見られる。また、バングラデシュの独立を

受けて、パキスタン国内で他地域への独立運動の機運の伝播について述べている (5-2-4)。興味深いのは、バングラデシュのパキスタン再統合の可能性について言及していることである (5-2-3)。

6. まとめ

断片的ではあるが、以上の発言から見えてきたマウドゥーディーの東パキスタン史観を整理し、まとめとしたい。

まず、ベンガル語を肯定していることを挙げたい。特に、国語論争が起きていた当初、ベンガル語の国語化に賛成の意を示していた (3-2-1)。ベンガル文学に関しては、存在の肯定はもちろんのこと、その内容がインドの影響下にあることを憂いており、脱ヒンドゥー教、脱インドおよびイスラーム化の必要性を説いていた (3-1-1, 3-1-2, 3-1-3, 3-3-3)。

2 つめに、関心の推移を指摘したい。東パキスタンについての発言を始めた 1950 年中頃は、ベンガル語やベンガル文学、合同選挙、自治権拡大の芽生えとなるような運動について触れていた。このうち、ベンガル語やベンガル文学に関する話題は、1956 年のベンガル語国語化以降は言及される頻度が下がっている。1950 年代後半から 1960 年代は、主な関心が選挙制度にあった (4-3-1, 4-3-2)。さらに、1960 年代後半は 6 項目要求に対する反論が主軸であった (4-2-1, 4-2-2 他)。

3 つめに、東パキスタンの独立に対する態度を読み取りたい。まず、ベンガル地方におけるヒンドゥー教徒の存在や共存を肯定していた (3-1-3, 3-3-1, 3-3-7)。ヒンドゥー教徒自体の排斥や、国外に追放するような発言は確認できなかった。ただし、ヒンドゥー教徒とムスリムの社会階層差を指摘しており (3-1-3, 3-3-1)、分離選挙を望んでいた (4-3-1, 4-3-2)。バングラデシュの独立が確実視されてくると、国外に対してはインドの陰謀説 (4-4-1, 4-4-2, 4-4-3)、国内に対しては、ムスリムの連帯を強調していた (3-3-5, 3-3-6)。東パキスタンの独立後は、バングラデシュの承認を否定し (5-1-2, 5-1-3, 5-1-4)、その存在を苦々しく思っていたことが伺える。

それでは、マウドゥーディーはどの時点でバングラデシュの独立を確実視していたのであろうか。1968 年の時点では、6 項目要求を退ける可能性について述べている (4-2-4)。後日談になるが、1971 年 1 月の自らの講演会が襲撃された事件が契機となっていたとも読める (4-1-6)。それまで各地で歓迎され、多くの聴衆を集めていたマウドゥーディーにとって、ショッキングな事件だったのであろう。娘の回想録でも、1971 年 1 月の事件のエピソードが出てくる (5-1-6)。1971 年 4 月には、各国の首脳に向けての手紙を出しており、緊急性が伺える (4-4-1, 4-4-2, 4-4-3)。

本稿では、マウドゥーディーが発信したメッセージを集約し、マウドゥーディーの東パキスタン観をまとめた。実際には、マウドゥーディーの発言の前後に東西パキスタンで様々な事件が起こっており、マウドゥーディーも多くの報道を耳にし、さらにマウドゥーディーの発言によって東西パキスタンの JI 党員をはじめ、少なからず影響を受けた人々がいるはずである。今後は、これらのマウドゥーディーの発言の持つ意味や、国内外の宗教家・活動家との双方向的な発言のやり取りを追いたい。

参照文献

［ウルドゥー語］

Aḥsan, Ḥafīẓurraḥmān. 1971. *Jamā'at-i Islāmī aur Mashriqī Pākistān*. Lahore: Tasnīm Akāḍmī.

Abū Ṭāriq. 1976. *Maulānā Maudūdī ke inṭarviyū*. Lahore: Islāmik Pablīkeshanz.

Gīlānī, Saiyid As'ad. 1974. *Maulānā Maudūdī: jin ke pās āp ke liye ek ahamm paighām hai*. Lahore: Maktabah-yi Ta'amīr-i Insāniyat.

Khān, M. A. 1983. *Maulānā Maudūdī ke ma'āshī taṣavvurāt*. Lahore: Maktabah Ta'mīr-i Insāniyat.

Ḥijāzī, Akhtar. 2008. *Guftār-i Maudūdī*. Lahore: Idārah-yi Ma'ārif-i Islāmī.

Ḥumairah, Saiyid Maudūdī. 2012. *Shajarahā-i sāyah dār*. Lahore: Manṣūrah. (2005)

Jān, Nūrvar. 2011. *Makātīb-i Maudūdī*. Lahore: Idārah-yi Ma'ārif-i Islāmī.

Jīlānī. 1995. *Mashriqī Pākistān se Bānglahdesh tak*. Lahore: al-Qamar Inṭarprā'iz.

Maudūdī, Saiyid Abū al-A'lā. 2004. *Āla Kuraānera sahaja Bāṃlā anubāda*, tranlated by G. Āyama. Dacca: Kāmiẏāba Prakāśana. (in Bengali)

———. 2011. *Khuṭbāt*. Lahore: Islamic Publications.

Nu'mānī, 'Āṣim. 1993. *Saiyid Maudūdī ke sāth guzure hū'e yādgār-i lamaḥāt (1968 tā 1979)*. Lahore: Manṣūrah. (1988)

［英語］

Abd, A. R. 1978. *Sayyed Mawdudi: Faces the Death Sentence*. Lahore: Islamic Publications Limited.

Adams, C. J. 1966. The Ideology of Mawlana Mawdudi. In D. E. Smith ed., *South Asian Politics and Religion*. Princeton: Princeton University Press, pp. 371-397.

Ahmad, S. R. 1976. *Maulana Maudūdī and the Islamic State*. Lahore: People's Publishing House.

Aly, J. H. 2007. *A White Paper Revised: Document to Debate and Finalize the National Education Policy.* Islamabad: National Education Policy Review Team.

Badri, M. B. 2003. A Tribute to Mawlana Mawdudi from an Autobiographical Point of View, *The Muslim World* 93(3-4), pp. 487-502.

Caldwell, B. 1982. *Beyond Positivism: Economic Methodology in the Twentieth Century*. London: George Allen & Unwin.

Chapra, M. U. 2004. Mawlana Mawdudi's Contribution to Islamic Economics, *Muslim World* 94(2), pp.163-180.

Gilani, S. A. 1984. *Maududi: Thought and Movement*. Lahore: Islamic Publications. (1978)

Hasan, M. 1984. *Sayyid Abul A'ala Maududi and his Thought*, vol1. Lahore: Islamic Publications.

———. 1986. *Sayyid Abul A'ala Maududi and his Thought*, vol2. Lahore: Islamic Publications.

Hartung, J. 2014. *A System of Life: Mawdudi and the Ideologisation of Islam*. London: C. Hurst.

Jackson, R. 2011. *Mawlana Mawdudi and Political Islam: Authority and the Islamic State*. Abingdon, Oxon: Routledge.

Khurshid, A. 2011. "Forward", In A. Khurshid ed., *First Principles of Islamic Economics*. Leicestershire: The Islamic Foundation.

PEC (Pakistan Educational Conference). 1948. *Proceedings of the Pakistan Educational Conference Held at Karachi 27th November-1st December 1947.* Karachi: Government of Pakistan, Ministry of Interior.
Rahman, T. 1998. *Language and Politics in Pakistan*. Karachi: Oxford University Press.
———. 2002. *Language, Ideology and Power: Language-Learning among the Muslims of Pakistan and North India*. Karachi: Oxford University Press.
Riaz, A. S. 1976. *Maulana Maududi and the Islamic State*. Lahore: People's Publishing House.
Saulat, S. 1979. *Maulana Maududi*. Karachi: International Islamic Publishers.
Zaman, A. 2011. Sayyid Abu'l A'la Maududi on Islamic Economics: A Review Article, *Islamic Studies* 50(3-4), pp. 303-321.

［日本語］
伊能武次 2002. 「『アフラーム』」大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』. 岩波書店, 60 頁.
加賀谷寛・浜口恒夫 1977.『パキスタン・バングラデシュ』南アジア現代史 2, 山川出版社.
小杉泰 2006.『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会.
篠置理子 2013.『マウドゥーディー著作目録と解題』人間文化研究機構地域間連携研究の推進事業「南アジアとイスラーム」.
浜口恒夫 1991.「パキスタンにおける都市化と民族問題—カラーチーの『ムハージル』を中心にして」『大阪外国語大学論集』6, 243-27 頁.
山中一郎 1992.「総論－パキスタンの主要政治エリート」山中一郎編『パキスタンにおける政治と権力』. アジア経済研究所, 3-106 頁.
山根聡 2001.「マウドゥーディーと「ダールル・イスラーム Dar al-Islam」のイスラーム復興構想—20 世紀インド・ムスリム知識人の動態的研究」『アジア太平洋論叢』11, 167-210 頁.

［ウルドゥー語雑誌］
Sayyārah. Lahore.
Tarjumānulqur'ān. Lahore.

FINDAS リサーチペーパーシリーズは、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業の出版物です。

人間文化研究機構（NIHU）http://www.nihu.jp/ja/research/suishin#network-chiiki
NIHU プログラム　南アジア地域研究（INDAS）http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/
東京外国語大学拠点　南アジア研究センター（FINDAS）http://www.tufs.ac.jp/ts/society/findas/

FINDAS リサーチペーパーシリーズ 2

「マウラーナー・マウドゥーディーの東パキスタン／バングラデシュ史観」

須永恵美子

2016 年 10 月 28 日発行　非売品
発行　東京外国語大学　南アジア研究センター
〒183-8534　東京都府中市朝日町 3-11-1
東京外国語大学 研究講義棟 700 号室 南アジア研究センター
TEL: 042-330-5222
http://www.tufs.ac.jp/ts/society/findas/

印刷　株式会社　美巧社　東京支社
〒170-0003 東京都豊島区駒込 1-35-4　グローリア駒込 2F
TEL: 03-6912-2255

ISSN　2432-437X